

# 旅の出会い肌で受信

## 俳優・関口知宏さん



30代の初めに東京から移り住んだ静岡県伊東市。相模湾が広がる海辺で

途中下車した岩手県・吉里吉里駅。駅からぶらぶら歩き出した俳優・旅人の関口知宏さん(43)は、民謡の調べに誘われて民家に立ち寄り、住人らに教わって一緒に踊り始めた。

NHKのドキュメンタリー番組「列島縦断鉄道12000km 最長片道切符の旅」の一シーンだ。2004年から出演し、その後同番組のシリーズで欧州、中国など世界中を旅した。自然体で誰とでもすぐに打ち解ける姿に、多くの人が共感した。



全国を巡り、地域性の違いを肌で感じることもある。「東北は雪の降る中、音ならぬ音が聞こえてくるかのような世界。静寂に感じ入ることで、太宰治のような本質論が生まれやすいんじゃないでしょうか」。対して九州は、木の生え方も火山の煙も人の印象も「もくもく」していたと表現する。「性格が気候や自然条件に影響されるってあると思います」



番組の出演に際して決めた旅のルールは「無理に感動しないこと。そして、リアクションがテレビ的にならないこと」。テレビの旅で本当の旅ができないかというチャレンジだったと振り返る。「困ったのは本当に感動したとき。オーバーアクションをしないから伝わりづらいだろうなという

ことが多かったですね」。スケッチブックを携え、その日の出来事を心象風景として絵日記に表現。それを挟み込むことで補った。

旅してわかったのは「自分がいかに受信型人間であるか」ということ。父は俳優・司会の関口宏、母は元歌手の西田佐知子という芸能一家に育った。自分も芸能界でさまざまな「発信」をしていくと当たり前のように思っていたが、壁にぶつかった。思い描いていた芸能界との隔たりに葛藤した時期があったという。「脚本通りに進むテレビ的な予定調和の展開が嫌いなんです。話していても相手の声を『受信』していないから。旅での出会いや出来事にきちんと向き合うなら、受け止めないといけないと思った」



東日本大震災後に復興支援のため東北を旅する人々を見ていて、日本人の旅も「受信」型に変わってきたと実感した。「単なる名所巡りでなく、地元の人と向き合っている。人の気持ちを酌む力がある、人のためにやりたいことが出てくる。豊かな時代になり、してもらって喜びよりも、してあげて喜びを求めているんじゃないでしょうか」

それには、鉄道の旅がうってつけという。目的を定めずに旅すると、受信に徹することができたらだ。「いい面だけでなく悪い面も見ている。事実を受け止めることに努めると、いくらでも広がり深めたりできますよ」

(文・中村さやか 写真・谷本結利)

せきぐち・ともひろ 1972年、東京生まれ。立教大卒業後、96年に俳優デビュー。2004年のNHK「列島縦断鉄道12000km 最長片道切符の旅」がシリーズ化し、海外にも舞台を広げた。著書に「『ことづくりの国』日本へ」(日本橋報社)。

